近代生活の中のカフェ

—— エドゥアール･マネとエドガー・ドガの作品における遊歩者の視線の比較

梅原 優花 （青山学院大学）

第二帝政期にセーヌ県知事ジョルジュ＝ウジェーヌ・オスマン男爵（1809-1891）のパリ改造にて大きな変貌を遂げたパリの姿は、多くの画家がカンヴァスに残した。エドゥアール･マネ（1832-1883）とエドガー・ドガ（1834-1917）はその代表的画家である。本発表では、彼らの描いた 19 世紀パリのカフェを主題とした作品群に着目し、それらを遊歩者の視線という観点から考察する。

これまでの 19 世紀後半のパリの近代生活を表象した絵画作品研究において、カフェを題材とした作品が中心的に論じられることは少なかった。マネの絵画作品を社会学的側面から研究した T・ J・クラークは、カフェやカフェ・コンセールの特徴として、様々な社会階級の者たちが一堂に会する場であると主張している。しかし、その研究はカフェの社会学的解明に留まり、絵画作品の具体的な分析は行われていない。そこで本発表では、絵画分析を中心に行うことで、実際に当時カフェに通っていた画家たちのカフェへ向ける視線を明らかにし、絵画内の人物とそれを見る画家との複雑な関係性を浮彫りにする。19 世紀後半のパリのカフェとは言わばパリの縮図であり、様々な社会階層の混在だけでなく、当時のパリにおいて蔓延っていた男女間の差や階級間の明確な隔たり、遊歩者が投げかける消費の目線など、様々な問題が体現されていた。だからこそ、画家たちにとってカフェとは重要な題材であったのだ。

本発表では、まず、カフェの歴史や特異性を明らかにし、ヴァルター・ベンヤミン（1892-1940）が提唱した 19 世紀パリの街を目的もなしに歩きまわるブルジョワジー男性を指す「遊歩者（flâneur)」という概念を用いて再考する。マネやドガを「遊歩者」として分析する研究は数多くあるが、カフェの場所の歴史や性質を踏まえた上で、実際に「遊歩者」としての画家がどのような視線を投げかけていたのかを明らかにしたものはない。カフェという特定の場所での分析を行うことで、その視線を明らかにする。

次に、エドゥアール･マネの《プラム》(1877) とエドガー・ドガの《カフェにて（アブサン)》(1875-76）などの比較分析を行うことで、両者の描き方の差異を明らかにする。この 2 作品では、マネはカフェに佇む女性をクローズアップした構図で描いているのに対し、ドガは並んで座る男女を画面右奥に描くことで鑑賞者との距離を演出している。この描き方の違いには、人物を眺める画家の視線の差異が明確に表われている。この視線の差異に着目し、両者の他作品や他の画家が描いたカフェの絵画作品の比較検討も踏まえ、明確にする。

以上のように本発表では、「遊歩者」としての画家たちがカフェに向けた視線、そして絵画の中に描かれた視線を分析し、マネとドガが 19 世紀後半のパリのカフェに見いだした近代生活とは何かを考察する。